

アジア研究教育ユニット 令和2年度教育研究報告書

事業課題名	非常勤講師任用
代表者名	伊藤正子
事業概要 (600字程度)	<p>東南アジア諸国はそれぞれ独自の国家語を有し、多くの国では日常生活のみならず大学においてもそうした国家語が使われている。そのため学生が東南アジアへの理解を深め、また有意義な学術交流を行う上では、東南アジアの言語の習得が不可欠である。本事業では、ベトナム語を対象にこの能力を向上させ、現地大学とのより有意義な人材交流に資することをめざす。特に、基本的な文章読解能力と初級会話能力の涵養に重点を置き、受講者の習熟度に応じて柔軟に対応する。「ベトナム語Ⅱ(初級)」として、ベトナム語教授の経験豊富な吉本康子氏が担当し、講義は、後期分の実施とする。</p>
成果の概要 (800字程度)	<p>本事業では、受講者数は、文学部学生が4人、AA 研究生が1人、医学研究科院生が1人であり、また制度上登録できないが、大学院研究生の参加もあった。前期に比べると若干減少したものの、学部生の積極的な参加が目立った。留学生や実習生として多数のベトナム人が日本にやってくるようになった現在、ベトナムは非常に身近になり、関心をもつきっかけも増えていることが背景にあるだろう。</p> <p>学部生では、多文化共生の課題に関心をもち、ベトナム語を生かしたいと考える人や、東南アジアの他言語とベトナム語の違いに興味をもち学習する受講者がいた。また大学院生は将来の留学やフィールドワークに備えて、ベトナム語能力の向上を目的として学習しており、渡航の際の現地語でのコミュニケーションや、現地語資料の収集にあたって、不自由なくベトナム地域研究についての研究活動を行うことができるようになりつつある。</p> <p>その他、日本国内のベトナム人に協力してもらって医療関係の調査をしている院生も受講していたが、コミュニケーション能力の向上につながったと思われる。</p> <p>コロナ禍でベトナムに渡航することが誰もできないため、受講して身に着けた語学を現地で実践することができていないことは残念であるが、受講学生のベトナム語の運用能力は本事業を通じて、着実に向上してきた。日本国内の多文化共生の実現のために活躍する人材の初歩的な学習として、大きな効果があったことは確かである。</p>